

第3回審議会の振り返りと確認について

小中一貫教育についての議論のまとめ①

- 池田市立ほそごう学園を視察した。
- 委員より小中一貫教育の背景や基本的な考え方について説明を行った。

子どもたち9学年の縦のつながり

9年間の人とのつながりができることが良い。
9年間という長い目で見ると、リレーゾーンができるので良いと思う。

昔は地方の学校でも、一貫教育のような形態があって、異学年の子どもたちの関係の中で、お互いに成長してきた。

年齢差がある関係がずっと続くので、なりたい10年後の自分が見えている感じで非常に良いと感じた。

従来の小学校・中学校の概念を覆えされるような学校だった。9年間で義務教育だということを改めて感じた。

異年齢のつながりの中で子どもたちはお互いに成長していくと思う。
少子化もあって地域の中での自然にできるつながりが少なくなっている分、子どもたちが異年齢のつながりの中で成長できるよう、一貫教育のような形で、大人が環境を創ってあげることも大事だと感じた。

小学生は、未来への展望を持てる。
良き先輩、良き大人への憧れがすごく出ている。
中学生は、優しさ、寛容性、あるいは包容力のようなものを学ぶ。
自分が引っ張らないという責任感も養われる。
小学生・中学生ともに相乗効果を生んでいる。これらを育てているのは、キーワードである「つながり」に全部含まれるのではないかと思う。

9学年の子どもたちが一緒に居ることで、下級生にとっては、憧れの気持ちや将来の展望が、上級生にとっては、優しさや責任感が感じられるなど、双方にとって相乗効果があるのではないか。

子どもは異年齢の関わりの中でお互いに成長していくものではないか。少子化やつながりが希薄になりつつ時代であっても、子どもたちが異年齢のつながりの中で育つことができるよう、大人が環境を創ってあげることも大事ではないか。

保護者や周りの大人にとっても、縦のつながりの中で10年後の姿がイメージできるなど、9年間という長い目で子どもたちの成長を考えていくことができるのが小中一貫教育の良いところではないか。

小中一貫教育についての議論のまとめ②

小・中学校の先生をつながり

1つの組織として、学校全体で課題に取り組むことができる環境は素晴らしい。門真でもこのような環境を創っていくというのは大事だと思った。

先生の意識が大きく変わっていて、小中一貫校の可能性のひとつに感じた。ただし、小中一貫校にしたら自動的に良くなるのではなく、共通の思いや目標を共有した上で、手段として、特性を活かした取組を考える必要がある。

先生が元気なのが印象的。自分の学校を自慢する気持ちがすごいと感じた。

小中が一緒になって、この地域の子どものことを一緒に考えていこうということで進める限りは、小と中の教員の間相互不信などはなくなっていく。

小学校と中学校の教師で、それぞれの立場で、お互いに思うことはある。共有する場ができれば、良い学校が創れるのではないかな。

小・中の先生が、子どもたちの成長過程や課題などの情報を共有して、9年間を見通した教育課程を考えることがメリットではないかな。

子どもだけでなく、先生の意識が大きく変化し、同じ目標に向かって取り組むことができるのも小中一貫教育の可能性ではないかな。

学校や先生にとって、小中が一緒になるのは、時間的な制約や物のサイズなど、現実的な課題もあるのも事実である。そういった課題も含めて、子どもたちの成長のために一緒に取り組むことで一体感が生まれ、良い学校につながるのではないかな。

小中一貫教育についての議論のまとめ③

その他(門真市の小中一貫教育)

大阪府内でも小中一貫校は増えているが、揃えて続ける部分で苦しんでいるところも多い。門真の教育全体としてしっかりとした軸を持つことが大事。

施設一体型のメリットはもちろんあるが、分離型で連携する形のメリットもあると思うので、一つがいいというだけではなく、様々な面で考えながら、最終的には、人懐っこい門真の子たちにふさわしいものを創ればいい。

小中一貫校を新しく創るところだけが、力が入るのではなく、他の学校にも同じように力を入れていって、全体を底上げして欲しい。門真市内であまりにも差が開いていく教育にはなってほしくない。

門真では、どこの校区が適正規模になるのか。適正は何かとは一概に言えない。小中一貫教育は、市町村の特性を出しやすい取組である。

議論全体のまとめ

小中一貫校は、子どもたちのつながりはもちろん、保護者や周りの大人にとっては、長い目で子どもの成長を考えることができ、また、小中学校の先生にとっても、つながりや一体感、意識の変化にも好影響を与えているようである。

議論としては、小中一貫校の視点を積極的に取り入れていこうという方向でまとまった。大いに可能性のあるものとして、これからの学校づくりに積極的に反映していくことにしたい。

ただし、単に小中一貫校だから良いということではなく、小中一貫教育を手段として、その特性をどう活用するのが大事。門真のめざす教育の軸を持って、全体で底上げにつながるよう取り組む必要がある。

人とのつながりの中で、自分の生き方を見つけるための教育について

- 人とのつながりの中で、自分の生き方を見つける門真のめざす教育について事務局より改めて整理を行った。



- 門真のめざす教育を実現する学校について議論を行った。

これらを実現するための学校とは？

縦のつながりを創る学校とは？

横のつながりを創る学校とは？

将来の自分とつながりを創る学校とは？

ほかの新たな学校づくりに必要な視点とは？

地域と学校とのつながりについて

○ 「横のつながりを創る」学校について、地域と学校との関わり方について議論となった。

様々な形で子どもたちを見守っていただいているが、学校がどのように地域の力を借りながら一緒にやっていくかは課題のひとつである。

ゲストティーチャー、サタスタや学び舎、昔遊びなど、今でも取り組んでいる。地域には幅広い知識や知恵を持っている人がもっとたくさんおられる。学習はもちろん、子どもの安全などにおいても活躍いただける場がある。

教師と地域が何か一緒にしようとする、夜に集まることが多い。地域の人も、保護者も働いていて、一方で教師もまた働き方改革と言われる中で、どのようにバランスを取りながら、お互いに納得して取り組むことができるかも課題。

門真では、皆気持ちはある。無理をしても結果的に良いものにはならない。みんながやれることを出し合いながら紡ぎ合わせるのが一番長続きして、結果的に良い学校、良い門真市に結び付くのではないかな。

小中一貫教育と両輪で、地域と一緒に学校を創っていくコミュニティスクールという仕組みを進めていくのが、効果的だと言われている。

地域の人が子どもたちの課題などをもっと知るためにも、保護者同士のつながりを深めることが大事ではないか。

地域全体で安心なまちを創るという意味でも、顔の見える関係が大事である。学校でのお祭りやイベントなどで、多くの地域の人や保護者、子どもたちが顔を合わせてつながる、そういう機会に地域を絡めていくシステムを創っていくことが大事ではないか。

通学路など子どもの安全をテーマにしたら、地域や保護者、子どもたちも一緒に考える場ができた。そういう場が、地域と子どもたちのつながりにもなるし、そういう機会をうまく作るのを考えるのが良いと思う。

学校は地域みんなが知っている場所なので、地域に解放できればいいが、セキュリティの課題もある。地域の活動でも、学校の教室を使わせてもらっている。学校も地域もお互いさまで、持ちつ持たれつ関係を創っていければ一番いい。

学校側の課題、地域への期待



地域と共に子どもを見守る学校へ
どうマッチングするか？



地域側の課題、学校への期待

地域には潜在的に子どもたちや学校へ協力したいという方が多くいる。いろんな分野に知識や知恵を持つ人材の宝庫である。こういった地域の人が参加しやすい仕組みを創って、上手くつないでいく工夫が大事ではないか。

学校は学校の活動をサポートできる地域の方に来てほしい。地域は学校をひとつの拠点としてつながりを創っていききたい。双方に具体的な思いや取組もあるので、うまく学校という場で仕組みが創れれば、地域と学校がつながるのではないかな。

地域のつながりが希薄になる中、子どもを真ん中にして地域と学校がもう一度関係を紡ぎ直すときではないか。子どもたちが将来を切り拓くために、地域と学校が一緒になって、「社会で人とつながる力」をつけてあげることが大切ではないか。

門真のめざす教育と学校のあり方について

縦のつながりを創る学校とは？

議論の方向性 ⇒ 義務教育学校も含めた小中一貫校の視点を積極的に取り入れ、
異年齢の関係の中で子どもが育っていくような学校

横のつながりを創る学校とは？

議論の方向性 ⇒ 子どもを真ん中に保護者や地域と学校がつながり、
地域と共に子どもたちの学びや成長を見守る学校
子どもたちが人とつながる力を身に付けることができる学校

将来の自分とのつながりを創る学校とは？

議論の方向性 ⇒ 子どもたちが将来の姿をイメージしながら、
自立に向けて育っていくことができる学校

ほかに新たな学校づくりに必要な視点とは？

議論の方向性 ⇒ 形式的に制度を採用するだけではなく、門真の子どもたちにどう育ってほしいかという像を共有し、
門真のめざす教育の軸を踏まえた学校づくりが大事ではないか。